

破られた沈黙・

戦跡壕

「わあっ、手榴弾だ！」その場に居合わせた私達は一斉に身体をのけ反らせた。てっきり缶詰のブリキ片の塊だろうと思い、形を整えるためハンマーで叩いていた物体が、なんと手榴弾だったのである。

当時の壕内の様子は、町民の方々から聞いてはいたものの、実際に目のあたりにすると、リアルさが増す。壕内に残されたつるはしの跡、どぜの入った薬ビン、重ねられたままのスカンマカイ（茶碗）、「サクラビール」と銘打されたビールビン、そして手榴弾。それらの遺品が五十年の沈黙を破って今、私たちに強く語りかけてくる。

掘り出された地下足袋を見て、一人の職員が「この人は、生き延びたかな…」とつぶやいた。

現在、西原町史編集事務局では、戦時中に使用された壕を、當眞嗣一氏（県立博物館教育普及課長）の指導の下に

調査を行っています。その目的は、終戦から五十年という時のながれの中で、落盤や開発で原形が失われつつある町内の壕を戦跡としてとらえ、考古学的に調査・記録することにあります。

町史編集事務局では、戦時中の陣地壕を約三十確認しましたが、これには住民の避難壕は入っていません。個人壕は数が多いと思われるだけに、その実態は困難です。町民の皆さんからの情報をお待ちしています。壕の中に眠る遺品たちの苦痛な沈黙を解き放ってあげませんか？

西原町役場文化広報課内

町史編集事務局

☎九四六一九八四六（内一七二）



△暗い壕の中に埋もれていた遺物たち…